

「大坂の史跡を訪ねて」連載35回目

オサタニ ヨシハル
長谷 吉治

【坂本龍馬ゆかりの大坂史跡】

今回は、地域ではなく「坂本龍馬」に関連する大坂史跡をご紹介します。これまでご紹介した箇所と重複するものもありますがご了承ください。

1 天保山跡

港区築港3丁目2(天保山公園)

▶ 天保2年(1831)、安治川と港口の川ざらえを行いました。その時に積み上げられた土砂が、高さ20mの小山となり、桜や松が植えられ、「浪華の新名所」として、当時は大変な賑わいだったようです。

その後、築港工事などでその姿はなくなり、現在は標高4.53mの「日本一低い山」として知られています。

近くに「山小屋(天保山山岳会)」の事務局が置かれ、登頂証明書がもらえるそうです。天保山は大坂町奉行所の管轄で、大坂三郷に貸し付けられていました。

大坂町民の行楽地として賑わったようです。

幕末期、嘉永7年(1854)9月(この年は11月27日以降「安政」と改元されています)、ロシア軍艦ディアナ号が天保山沖に現れ、大坂に緊張が高まりました。以降、各藩が天保山で警備を担当します。

外国船、幕府の艦船、各藩の艦船が天保山に現れます。

第14代将軍徳川家茂が上京する際、江戸へ帰る際、また勝海舟の案内による摂海(大阪湾)巡回の際にも、ここ天保山にて船の乗り降りを行いました。

鳥羽伏見の戦い後、徳川慶喜が大坂城から抜け出し江戸へ逃げ帰る際も天保山から船に乗っています。



■坂本龍馬と天保山

坂本龍馬は脱藩前を含めて数回大坂を訪れています。そのうち船を利用したケースが非常に多く、入港・出港ともにここ天保山を利用しています。主に幕府の軍艦で江戸や兵庫へ向かったり、薩摩藩船で鹿児島へ向かったりしました。お龍と鹿児島へ向かう時には、薩摩藩船「三邦丸」で天保山から出港しています。この鹿児島行きは、日本最初の新婚旅行ともいわれています。

津本陽著の小説「龍馬 四 薩長篇(角川書店)」のP276から抜粋します。

三月四日朝、龍馬たちは川船で下り、大坂沖に碇泊していた三邦丸に乗り込む。五日の早朝に出発した。その日は新暦で四月十九日である。

2 天満八軒家船着き場跡

中央区天満橋京町2-9

- ▶ 古くから「窪の津」「渡辺の津」といわれ、平安時代から四天王寺や熊野詣での人々の上陸地でした。江戸期のこの辺りには船宿が8軒あったことから八軒家と呼ばれました。京・大坂を淀川で結ぶ場として非常に賑わっていたようです。30人乗りの30石船が往来していましたが、明治期に入ると次第に衰えていきました。



近くにある石段

3 天満八軒家 船宿 堺屋跡

中央区天満橋京町1(京阪シティーモール)付近

- ▶ 前記の天満八軒家にあった船宿のうち「京屋」は、新選組の定宿でした。「堺屋」は京都伏見の「寺田屋」(坂本龍馬の定宿で伏見奉行に襲撃を受けた場所)と提携していて、坂本龍馬が利用していた可能性も高いと思われます。

津本 陽 著の小説「龍馬 四 薩長篇(角川書店)」のP95から抜粋します。

寺田屋は、大坂天満八軒家の、堺屋源兵衛という船宿と提携していた。
寺田屋の三十石船に乗った客は、八軒家の河岸にあがると、堺屋で休むのである。

司馬遼太郎 著の小説「竜馬がゆく 六 (文春文庫)」のP204から抜粋します。

天満八軒家は、伏見へのぼる淀川船の大坂駅になっている。
天満橋と天神橋のあいだの南岸の地で、川ぶちに船宿がびっしりと軒をならべ、京大坂をのぼりくんだりする旅客でにぎわっていた。そこに京屋という船宿がある。
京屋は新選組の御用やどで、将軍の大坂滞在中は、ここに一小隊が駐屯し、上下する旅客をあらためていた。隊長は、藤堂平助である。藤堂は京屋の二階手すりに身をもたせかけ、下をゆく旅客を見おろしていた。(はて?)と、藤堂が目をこらしたのは、この日の昼まえである。
黒木綿の紋服をきた長身の武士が、京屋のとなりの堺屋という船宿から出てきた。
まぎれもない坂本龍馬である。柏餅のようなかつこうの蕪山笠をかぶっている。

4 勝海舟寓居跡(専稱寺跡)

中央区淡路町3丁目2-13、14

- ▶ 文久2年(1862)閏8月17日、軍艦奉行並に就任した勝海舟は、同年12月、軍艦順動丸で大坂天保山に投錨し来坂しました。その後、大坂を基盤に兵庫、泉州、紀州などを訪れ、砲台の設置場所を吟味しています。「海舟日記」によりますと、

文久3年2月27日に『朝、上陸。安治川一丁目順正寺旅館に到る。(以下省略)』

と記されており、「順正寺」を大坂の寓居先にしていたことがわかります。順正寺の場所は、現在の大阪市福島区野田1丁目、中央卸売市場のあたりにありました。

勝海舟は寓居先をすぐに変更しています。

「海舟日記」の文久3年3月朔日には、次のような記載があります。



勝海舟

『(前文省略)大坂へ船行。此日、旅宿を北溜屋町 真正寺に定む。
坂下[本](坂本龍馬)、新宮(新宮馬之助)、京師より来る。』

この日より、元治元年11月10日、軍艦奉行を罷免され、江戸にて蟄居を命ぜられるまでの間、大坂の寓居先としていました。

文久3年6月13日より、一時期(約3ヶ月間)江戸へ帰っていました。

しかし、すぐに大坂へ呼び戻されます。文久3年9月9日の「海舟日記」には、

『朝、上陸。天保山沖へ入津。同日、雅楽頭殿はじめ役々、上陸、専修寺旅宿へ入る。』

とあります。勝 海舟の大坂寓居先の手がかりは、これだけになります。「海舟日記」にある「北溜屋町」や「真正寺」は実際に存在しませんでした。「専修寺」は此花区西島3丁目に同名のお寺が存在しますが、幕末当時、この「専修寺」は堺にあり、明治になってから此花区に移っています。従って、勝 海舟の寓居先とはまったく関係ないことがわかりました。

勝 海舟は、寺名や町名を誤って日記に記載したのではないかと考えられます。

一方「順正寺」は実際に存在していました。

「慶応四年目録」(川口居留地開設直後の外国人との応対や外国事務局の動静を記す資料)に

『(慶応4年)九月二日 亥 晴 (途中省略)安治川上壱丁目 順正寺へ丸亀人数旅宿
申付置候処、(以下省略)』

と記されており、他の資料においても実存が確認できます。

「順正寺」はその後、大阪市西区京町堀、さらに東淀川区と移転し、昭和34年廃寺になりました。

浄土真宗 専稱寺

勝 海舟の順正寺の次の寓居先は、当時の北鍋屋町にあった「浄土真宗 専稱寺」です。

北鍋屋町はその後の町名変更で、淡路町3丁目になり、区画整理などで更に変更し、現在の淡路町2丁目5～6、同3丁目1～2あたりが、北鍋屋町に該当します。

専稱寺があった場所の確証が取れる資料はなかったのですが、大阪市史を研究されている先生に助言をいただいたところ、「北鍋屋町水帳」(安政3年作成)と「大阪地籍地図」

(明治44年作成の大阪市地図)の2つの資料を照らして判断すると、現在の淡路町3丁目2-13(スワン大阪第一ビル)及び、2-14(ノリタケビル)あたりだという結論にいたりました。

「北鍋屋町水帳」は北鍋屋町にあった全ての建物の横幅・奥行き寸法、及び持ち主が記載されており、それらの建物一つ一つの寸法と地図を見比べますと、この場所だということになります。



勝 海舟寓居跡



「専稱寺」は、「東区史」において北鍋屋町にあったことが記載されています。また、神戸市葺合区吾妻町に移転したことも確認することができました。

葺合区は今の神戸市中央区で、ちょうど葺合警察署がある付近となります。2002年2月、現在の専稱寺を訪ねてみました。

ご住職さんの話によりますと専稱寺と勝 海舟は関連があり、それを裏付ける資料も残っていたそうです。その資料の中には、坂本龍馬が専稱寺でお世話になった記念に、絵のようなものを残していたそうです。しかし、昭和20年の空襲による戦災で、貴重な資料は全て焼失してしまいました。

「専稱寺」は、浄土真宗本派本願寺門下で、慶長13年(1608)12月28日、祐性という僧が、北鍋屋町にて開山します。



現在の専稱寺

5 大坂海軍塾（勝塾）跡

文久

記」

『
。』 企を

とあ 坂の塾 文字が出てきます。勝海舟は、大坂の寓居 ある専稱寺に

述

『神戸操練所

申す。』



ですが、確か、こ

『(前文省略)大坂へ船行。此日、旅宿を北溜屋町 真正寺に定む。
坂下[本](坂本龍馬)、新宮(新宮馬之助)、京師より来る。』と記されています。

坂本龍馬が乙女にあてた有名な手紙は、この時期に書かれています。

『叔もへ 人間の一世ハがてんの行ぬハ元よりの事、うんのわるいものハふるよりいでんとして、
きんたまをつめわりて死ぬるものもあり。夫とくらべてハ私などハうんがつよくなほほど死ぬるバへ
でゝもしなれず、じぶんでしのふと思ふても又いきねばならん事ニなり、今にてハ日本第一の人物
勝麟(麟)太郎殿という人にてしになり、日々兼而思付所をせいといたしおり申候。

(以下省略)』[文久三年三月廿日]

『此頃は天下無二の軍学者勝麟太郎という大先生に門人となり、ことの外かはいがられて候て、
先きやくぶんのよふなものになり申候。ちかきうちにハ大坂より十里あまりの地にて、兵庫という所
にて、おゝきに海軍ををしへ候所をこしらへ、又四十間、五十間もある船をこしらへ、でしども二も
四五百人も諸方よりあつまり候事、

(以下省略)』[文久三年五月十七日]

「海舟日記」の文久3年4月16日に

『龍馬、越前へ出立。村田へ一封を遣わす。』

とあり、更に6月11日には

『大和の浪士、乾 十郎、大義企ての事あり。この義を塾中紀藩の者へ密告するものあり。

坂本、新宮、佐藤の三子を遣わし、詰問せしむ。』

と記されており、勝 海舟の来坂中に龍馬の名が確認されます。

専称寺の勝 海舟を訪れ、細かな打ち合わせがあったものと思われます。

また、6月26日の「海舟日記」には次のような記載があります。

『大坂より、俵次郎、半兵衛、来る。聞く、大坂の塾へ、長藩五十人程来たり、凶書殿
を打つ企を告げ、同志を募ると云う。龍馬子、これを説解し、敢えて同ずる者なし。』

長州藩士50人ほどが、小笠原凶書頭長行の襲撃を計画しており、海軍塾の塾生を誘致しようと
していましたが、坂本龍馬がこれに参加しないよう塾生たちを抑え、勝 海舟不在中の大坂の塾
をしっかりと守っています。

津本 陽 著の小説「龍馬 三 海軍篇(角川書店)」のP134から抜粋します。

八日(文久3年5月)に(大坂城に)登城し、夜になって専称寺へ戻ると、塾生たちを呼んだ。

(途中省略)海軍塾の塾頭である佐藤与之助も、その場にいた。(途中省略)

麟太郎は五十人ほどの弟子たちに取り巻かれ、はにかみながらいった。

(途中省略)

龍馬は心を揺さぶられた。

上記の同小説、P156から抜粋します。

文久三年(一八六三)六月六日の朝、龍馬は塾生募集に出向いていた岡山から、便船で大坂
へ戻った。梅雨があげ、海上を渡る風が乾いて心地よい。専称寺の山門をくぐると、やかましく
蟬が啼いていた。海軍塾の塾生たちは、風通しのいい縁側で寝転び、雑談していた。

6 海援隊 大坂詰所(薩万)跡

大阪市西区

<海援隊について>

慶応元年(1864)閏5月に薩摩藩の庇護のもとで発足した浪士結社「亀山社中」から、
土佐藩の支配のもとに「海援隊」が発足したのは慶応3年(1867)4月(10日頃)でした。
同時に中岡慎太郎を隊長とする「陸援隊」も組織されています。

脱藩罪を許された坂本龍馬が海援隊の隊長に任命され、長崎の貿易商小曾根邸に
本部を置きました。

武器・軍艦などの兵器の商取引、「閑愁録」などの出版事業など多角的な運営が
進められました。

そのため、長崎の本部をはじめとして、京都・下関・大坂などに出張所(屯所)を
設けました。京都の屯所は材木商 酢屋、下関の屯所は大年寄 伊藤助太夫邸
の一室「自然堂」に設けていました。

さて、大坂の屯所は薩摩屋万兵衛(通称 薩万)に置きました。

薩万は人足差入屋・宿屋などの説があります。しかし、どこにあったのか史料が少なく、
場所の確定がなされておらず、可能性の高い場所として紹介いたします。